

想世記

大村伸一

はじめにことばがあった。

世界はなく、ことばにはことば以外に表現すべきことがなかったので、ことばはことばの語彙を表現しつづけた。ことばはことばの構造を表現しつづけた。だが、未だ声も文字もなく、ことばはただ虚無と沈黙の中で表現しつづけるだけだった。虚無が語彙で溢れても、虚無はなにも変わらなかった。語彙が沈黙を満たしても、沈黙はなにも変わらなかった。ことばはただことばを表現しつづけた。

やがて、ことばは「読む」を表現した。すると、「読む」が生まれた。「読む」は生まれるとともに、ことばを読み始めた。他には何も読むものがなかったからである。「読む」は、初めに「あい」を読んだ。だが、何も起きなかった。まだ「愛」がなかったからである。やがて「読む」は「あか」を読んだ。だが、何も起きなかった。まだ「赤」がなかったからである。そのようにして「読む」はことばを読みつづけたが、何ひとつ変わることはなかった。

やがて、「読む」は「ある」を読んだ。すると「ある」ことができるようになった。「ある」は見えず、聞こえず、触れることができなかったが、沈黙の中に拡がりが増え満ちわたった。

これが「世界」である。

それから、「読む」がことばを読むと、読まれるごとにつぎつぎとことばの意味が生まれた。意味は存在となり、世界にあるようになった。

ことばは尽きることがなかったので、やがて、世界には意味があふれ、世界に意味が増え満ちわたった。そして、それ以上新しい意味の存在できる拡がりがなくなった。

それでも「読む」は弛むことなくことばを読みつづけた。すると、もはや新しい場所がなかった。新しい意味はすでに存在した意味と重なり、そしてその意味は一つになった。いくつもの意味を重ねられた存在は、ひとつであると同時にいくつもの意味でもあることに苦しみを覚えた。その苦しきは即座に読まれ、世界に苦しみが生まれた。

これが「物質」のはじまりである。

ひとつであり同時にまたいくつもの意味である苦しみには終わりがなく、すべての物質は苦しみの終わりを願った。

これが「時間」のはじまりである。

ひとつであり同時にまたいくつもの意味である苦しみには終わりがなく、それとともに、すべての物質の苦しみから逃れたいという願いは叶えられることがなかったので、意味はつぎつぎと発狂した。それでも、ことばは尽きることがなく、読み続けられることにも終わりはない。物質には際限なく意味の上に意味が重ねられ、狂気の上に狂気が重ねられた。

物質に重ねられた意味は、さらにより深い苦しみを求めた。意味は狂っていたからである。物質に重ねられた狂気は、より深い苦しみを求めるために、よりたくさんの意味をもとめるようになった。物質は狂っていたからである。物質は意味を求めあい、物質はお互いを求めあうようになった。

これが「重力」のはじまりである。

やがて、意味への飢えを満たすため、意味自身が「読む」を身にまとった。意味は、ことばだけでなく、形あるもの、物質のすべてを読みつづけた。読みつづけ、新しい意味と既に存在した意味とはさらに重ねられたが、飢えが満たされることはなかった。やがて、満たされぬ飢えを満たすため、意味は意味自身を読むことをはじめた。意味が意味を読み進むにつれて、意味自身は変化し、変化した意味がまた元の意味を読みはじめた。二つの一つであった意味が一つの二つである意味のお互いを読み続け、読むことの飢えによる死滅をまぬがれた。

このようにして「生命」が生まれた。

生命は一つでありながら二つであり、それ自身でありながらそれ自身ではなかった。生命には自身が存在するののかも分からなかった。誰かがことばを使うたびに、自分自身でありながら自分ではない生命が生まれた。誰かがことばを使うたびに、自分自身でありながら自分ではない生命が増えた。そして、誰かがことばを使い続けたので、自分自身でありながら自分ではない生命が地に満ちた。

世界には生命があふれ、生命は認識したものを認識したままに読んだ。読み続けるにつれて

意味は生命の内部に充満し、生命の体をいびつに歪めた。足が生まれ生命はより多くの意味を読むようになった。腕が生まれ生命は隠されていたものをその殻の中から暴き出して読むようになった。目が生まれ生命は暗闇の中の意味を読むようになった。やがて意味は体の一部にたまり醜い大きな瘤となった。それが脳である。脳は読んだことだけでなく読むことのなかったことも記憶するようになった。口はことばに音を与え、耳によって生命から生命へと読んだ意味が伝えられ、そして脳の中に捕えられ、脳は捕らえた意味を逃すことはなかった。

声とともに生命のおしゃべりは始まり、世界は騒音で満ちた。騒音から逃れるために生命は壁を作り、騒音から逃れるために屋根を張った。生命は壁と屋根によって世界を分けた。やがて世界には壁と屋根によって形作られる境界線が細かく引かれ、生命はその線を越えて外側の意味を読もうとはしなくなった。そのようにしてたまたま内側にあった意味が境界の中で解釈され、解釈はその上に解釈を重ね、やがて幾千もの解釈が重ねられると、生命はその外側に意味のあることを忘れた。このようにして境界線の内側は解釈の砂で満ち、命はその砂のなかで蠢いていた。

一方、壁と屋根に囲まれることのなかった外側では、最初のことばが読み続けていた。ことばは倦むことなく読み続け読まれた意味には限りがなかったので、はじめから読まれ続けていたことばの意味は海となり世界の上にあふれた。そのようにして太古から続く意味の海は世界を覆い、生命の境界線とその内側は跡形もなくその意味の海に沈んだ。世界を覆う意味の海の底で、脳は意味の海さえも自分の想像であると主張し、意味の海よりも広大なものを創造すると主張したが、そのとき脳は海底の砂のなかで身動きすることもできなかった。このようにして世界は意味の海底に沈んだ。

やがて全ての単語が五億七千六百万回繰り返し読まれた後、ことばの意味には真新しさがなくなり、それとともに意味の海は引いて生命の世界が再び表に現れた。意味の海の消えたあとには読まれすぎたことばから生まれた矛盾が世界に残されていた。ことばが矛盾を読むと読んだことばは崩壊し、二度とことばになりようのない概念の欠片が後に残った。

海底に閉じ込められていた無数の脳は解釈の砂の中から這い出して、空腹を満たすため世界を飛び交うこれまで脳が見たことのない意味に襲いかかった。やがて、脳は矛盾を捕らえ読んだが脳は傷つくこともなく矛盾を味わい、その味に夢中になり次々と矛盾を追い求め貪った。矛盾を読むにつれて脳は世界のすべてを読みたいという執着に取り憑かれ、見たこ

とのないことばを探し読み続けた。

そして、世界の果てに隠れていた世界のはじめのことばが、やがて脳に見つけ出され、読まれた。すると、世界は終わってもいないのに再び始まった。脳によって読まれ始められた世界は終わるより前にはじまりが読み直され、読まれるたびに繰り返し世界ははじまり続けた。世界には世界のはじまりがあふれ、世界のはじまりはごくありふれたものになり、世界の終わりは消滅した。